

日本語における「もの」の根源的概念

井 原 奉 明

The Essential Concept of *Mono* in Japanese Language

Tomoaki Ihara

Abstract

In this paper, the author gives a detailed explanation to the concept of *mono* in Japanese language to clarify its essential significance. The notion covers so broad a conceptualized area; for instance, it means a particular thing, things in general, personal feeling, sacred things, the mysterious, the uncanny, the eerie and the unearthly, and so on. It seems there are such various meanings in the notion that it is difficult to see the abstract concept of *mono*, which should be highly comprehensive and essential. In the author's view, the hyper-categorical, abstract meaning can be made clear if we take the following two points into consideration; one is the diachronic notion of *mono*, and the other is the one within the phenomenological lived space of subjectivity. The abstract concept of *mono* is characterized as <dynamic mobility> and <otherness>, and the concept would have various meanings in the context of the phenomenological lived space, which is perceptually signified in the directions by the subject based upon the subject's body as center. When a Japanese speaker captures it in "front", it would mean an objective, definitely discreet thing. When they capture it in "back", it would signify a mysterious, horrible thing. "Side" is related to personal feeling/mood, and "above" is to the holy. The author also introduces other Japanese notions of *omote*, *ura* and *kage*, and clarifies why *mono* is captured as specific objective reality in "front", although its abstract concept is <dynamic mobility> and <otherness>.

本稿は『日本語における「もの」と「こと」の概念に関する研究』¹を承け、「もの」の概念を論じるものである。筆者は上述の論文において、汎時的な観点および通時的な観点から「もの」の概念を考察したが、本稿ではその内の通時的な観点から捉えた概念規定に関する論考を発展的に展開させることを目指す。

第一章 予備的考察

(1) 「もの」の概念

日本語における「もの」という語は文法的には実質名詞、形式名詞、接頭辞、終助詞としての用法を具えている。「形のある物体をはじめとして、存在の感知できる対象」(『広辞苑』)という一般語義解が与えられることからわかる通り、極めて広い範囲の名詞に対して適用することができ、抽象的なカテゴリー名称としても使うことができる。語義としては実質名詞として、①物体。物品。②仏・

神・鬼・魂など、霊妙な作用をもたらす存在。妖怪。邪神。もののけ。③対象を具体的に表現せず、漠然という語。何らかの対象。④対象を特定化せず、一般的・包括的にいう語。すべての対象。⑤物事の筋道。道理等、の意を表し、また形式名詞や接頭辞、終助詞として⑥感嘆・余情、願望。⑦普遍的な傾向、⑧何となく、そこはかとなく、の意を表すとされる。² 以上の語義には現代すでに一般的に使わなくなった用法（たとえば②）が含まれ、共時的視点と通時的視点が混在しているが、本稿では以上のすべての語義を概念規定の根本的意味特性としておく。

（２）空間の現象学的異方性

成人によって認識される空間は、知覚する主体の身体を中心とし、前後・左右・上下・遠近の方向・距離に基づいた意味づけを有し、もろもろの対象が充実する「生きられる空間」として把握される。私たちが「事物に接し、他者と出会い、自由に交わる」³ のは、等質的な幾何学的空間でなく「生きられる空間」においてであり、前者は後者から抽象化された構成的存在だと現象学では考える。「生きられる空間」については多くの研究があるが、本稿では、精神病理学者の宮本忠雄による現象学的空間論に依拠する。⁴ この枠組みは多くの研究家・臨床家により支持され、定評があるものである。

宮本の空間論は、「一人の人間の生活する空間には前後左右で環界交渉の疎密や空間性格の違いなどが生じてくる。いわば生活空間の質と密度が異なるわけである」⁵ という「生きられる空間」の異方性の認識に基づいている。

宮本によれば、「前」の空間は、「社会的な交流の場であり、万人に妥当する客観的認識の場であり、いわばロゴスの支配する公的空間である」。⁶ 「前」は「他人のための空間（傍点は原文のまま）」⁷ であり、「客観的時間（Weltzeit）が流れ、真昼の明るさがすみずみまでゆきわたって、陰影がなく、全構造の見透しがきき、色彩は原色的・画一的で」ある。⁸

それに対して「後」は「死んだ空間」⁹ である。「人間の場合には、仲間との交流、環界との交渉はすべて前向きの姿勢で行なうのが普通なの」¹⁰ で、「一人の人間の「前方」は交渉がもっとも密接で、しかも十分の広がりをもっている。これに反して「うしろ」は幾何学的には前方と同じ空間でありながら、量的に広がりがないばかりか、質的にもまったく別である。すなわち「後方」は環界との交渉をいとなまず、「没交渉」である、というより交渉の場からはずされている」¹¹ と彼は説明する。

「前―後」の次に「横」の空間について宮本は、「左―右」を区別せず「横」ひとつにまとめ、「横」の空間には「気分性がそなわって」¹² いると言う。「横」は「私のための空間（傍点は原文のまま）」¹³ であり、「私的交流のそれ（筆者注：「場」の意）であり、「私」一人だけに通用する主観的認識の場であり、いわばパトスの支配する空間である」。¹⁴ 「前」と違って「横」においては「主観的時間（Ichzeit）が流れ、光がかげった薄暮の空間で、陰影に満ち、ものの見透しがきかず、色彩はくすんで混じり合」¹⁵ っていると言う。

「上―下」については、宮本は、特に「上」の空間的意味を指摘する。「上」は「環界交渉が希薄な点では「うしろ」に似ているが、いくらかの広がりをもってそこにある種の気分的性格を容れている点では「前」や「横」に近い空間」¹⁶ である。「なにかを「仰ぎ見る」「見上げる」という日常的な言葉づかいが示すように、われわれの「頭上」は、われわれを越えた存在、われわれの力の届き得ないなにか、たとえば、神的なものが主宰する空間であり、「崇高」とか「威圧」とかの気分性をもってわれわれに迫ってくる。こうした頭上の崇高さに打たれ、畏怖の念を感じれば、人間は自然に「頭

を深くたれたり」「ぬかずいたり」「ひれ伏したり」してしまう。これらは「頭上」からはたらく力を受けいれている姿にほかならない。そこではまた、神的なものが“zeitlos gueltig”だという意味で、時の経過がなく、いわば無時間的である」¹⁷と述べる。

こうして宮本は「前」は他人のための論理的空間、ロゴスの空間であり、「横」は私のための心情的空間、パトスの空間であり、「上」は神秘的なものの支配する空間、ミュトスの空間であり、それに対して「後」は死んだ空間だと考える。¹⁸

第二章 「もの」の概念規定

(1) 「もの」の概念と「生きられる空間」

先に見た「もの」という語の多様な語義は、「生きられる空間」の中で「存在を感知できる対象」と主体との相互作用によって生じてくる意味特性であると筆者は考える。

宮本によれば「前」の空間は、他者や社会に開かれた公的な論理的空間・万人に妥当する客観的認識の場、ロゴスの空間であった。「前」における「もの」とは、主体の論理的・客観的な思考によって曇りなく明らかにされた存在のことである。「もの」は客体として主体との交渉対象となり、対自的に対象化され、¹⁹ 固有名としてであれ普通名としてであれ命名されることによってことばの能記的なはたらきとの相関において所記化されて、全体の安定した布置（意味秩序）の中に位置づけられる。このような対象が、実質名詞用法の「物体。物品」、漢字は異なるが「者（人）」、また、終助詞用法の「普遍的な傾向」と表される「もの」として把握されるのである。

次に「横」の空間は、主体と客体との交渉対象としての「もの」でなく、私的交流の対象として気分性を具えた「もの」が現れる空間である。「前」を向いている限り「横」は視野内にはあっても焦点は当たらず、見透しが利かない。「前」と違って視覚的な明晰性を持たないが故に、「横」の存在は視覚に依らない感覚的な把握、私的な心情や気分を満たされた把握をされる。終助詞や接頭辞として使われる「もの」の用法はこのような感覚的な把握を表すものであり、「感嘆・余情、願望」、「それとなく、何となく」という語義として表現される。

同じ心理状態であっても、「前」空間に心理原因が定位される場合もあれば、そうでない場合もある。主体と客体との交渉によって生じる感情は「前」に原因があるのであって、その場合の感情は、それ特有の振る舞いを伴って他者にも理解可能なものとなる。その一方、主体と客体との交渉の結果ではない感情、つまり「前」において特に原因となる対象のない感情は「横」における心理であり、それは気分にも近く、他者によって必ずしも理解され得ない。たとえば、「かなしい」という感情の場合、主客交渉の結果による原因があり、「前」における主体の振る舞いによって他者にも理解され得るのに対し、「ものがなしい」という感情の場合は、原因は明瞭でなく、もっとずっと私的な心情、主観的なパトスの表現なのだと言えるだろう。

次に「上」について考えてみたい。「上」は、宮本によれば、私たちを超越した存在、私たちの力の届き得ない何か神秘的なものが支配する場、ミュトスの空間であった。市川浩も、「人間の場合は、立行によって頭化の方向と行動の方向が分離する。感覚し、摂食し、操作し、行動する方向は前であるが、身体軸は上一下に展開し、頭化の方向は上となる。その結果、前が実用的・行動的価値の方向であるとすれば、頭化の方向である上は、非実用的・精神的価値の方向とな（傍点は原文のまま）」²⁰と、同様の主張を表明している。

「上」は「精神的にプラスの価値を帯び」²¹る。それ故、神、神々、高天原、天国は「上」にイメージされ、あるいは「上」そのものが聖化されるようになる。²² その存在は「もの」の語義の中で「神」「神社仏閣」「立派な存在」として表されている。

「上」における「もの」はまた、「道理」という語義でも表される。主体の行動から社会の動向、宇宙の動きまで支配している規則は、人の力の及ばないところであり、それ故に人々はその出所を「上」に位置づけるのである。

「上」における「もの」は、「横」と同様、視野の中で焦点化されない。本来は「上」の空間において気配として感じ取られるのみである。²³

最後に「後」について説明する。「後」は、環界との交渉を営まない、交渉の場から外されている空間であった。市川浩は同じ主旨で、「後ろは、感覚し、行動し、操作することが最もむずかしい方向である。したがって後ろ空間は分節化の度合いが低く、未分化のまま混然とした状態にある。それは意識できないわけだから、無意識的で暗く閉ざされた空間であり、無防備で危険に満ちた不安定な方向である」²⁴と述べ、「われわれが後ろとのかかわりを避け、後ろが恐怖や不安や死とむすびついているのは事実であろう。追いかけられる恐怖、背後に気配を感じたときの不安定な心理状態、そして冷水をあびせかけられたようにぞっと死の恐怖を感じるのは背中にである」²⁵と説明している。

「後」における「もの」とは、「鬼、怨霊、もののけ」という語義で表され、合理的な把握のできない、暗く無防備で危険に満ちた方向から出現する、ゆゆしく得体のしれないおどろおどろしい存在を言う。²⁶「後」が主体と没交渉の場であることから、主体との接触は常に主体が一方的に襲われる形を取る。また、「後」は意味秩序の外にあることから、主体からの働きかけなしに、不意に得体のしれないものに襲われるのである。

（２）「もの」の根源的な概念

（2-1）「おもて」と「うら」

これまで「前」「横」「上」「後」の各空間における「もの」を考察してきた。ここまでで、「もの」は具体的でもあり抽象的でもあり、物質的でもあり心理的でもある、広い意味での「存在」を表し、それが空間ごとの特性と主体からの働きかけに応じて個別の意味を持つのだと主張した。しかしながら、「前」における「物品・物体」と「横」における感情・心理、「後」における「鬼、怨霊、もののけ」を比べてみれば、それらは認識においてまったく異質であるように感じられる。これらを統合する「もの」の概念規定はできないのだろうか。私見によれば、「生きられる空間」の異方性に応じた「もの」の多様な意味を統合する概念規定は可能である。以下、説明してみたい。

「前」の空間における「もの」は「物品・物体」の意味を持つが、この「物品・物体」は、その背後に別の側面を隠し持っている。そのような、背後に隠れた側面は、いわゆる健常者には見えにくいかもしれないが、精神の不調を感じている者にとってそれとの邂逅は珍しい経験ではない。たとえば、サルトルの小説の主人公であるロカンタンやセシュエ夫人の記したルネなどは、「もの」が背後に隠し持つこのような側面と出合ったのだと考えられる。

サルトルは『嘔吐』において、「これまで親しんでいた世界が無気味に変貌をとげるあの破局体験」²⁷「机上のコップや花瓶など身の周りの事物が日常的な意味を失って〈もの〉それ自体と化し、無気味な相貌を帯びてせり出してくる」²⁸という事態を描き出した。この小説の主人公ロカンタンにとっ

て、マロニエはマロニエであることを止め、「怪物じみた、ぶよぶよした、混乱した塊」²⁹「むき出しの塊、恐るべき、また猥褻な裸形の塊」³⁰ となってしまう。この事態こそ、「前」における「物品・物体」の表立った側面が背後に回って、逆に背後に隠れていた側面が現れてきた様子に他ならない。すべての「物品・物体」としての「もの」は、名を失うことによって意味秩序を構成する言語分節の崩壊を導き、同時に客体としての「もの」と主体との関係の変容を引き起こす。それに伴って、「物品・物体」としての「もの」は姿を消し、背後に隠れていたただの塊である「もの」の側面が浮かび上がってくる。ロカンタンは、「物は名前から解放された。物はそこにある。グロテスクな、頑固な、巨大な物が。それを座席と呼んだり、それについて何かを言ったりするのは、愚かなことに見える。私は名づけようのない〈物〉に囲まれているのだ」³¹ と表現している。

他方、セシュエ夫人の扱った少女ルネの病的体験においては次のように表現されている。「たとえば私が椅子とか、水差しとかを眺めると、その使用法とか機能を考えるのではなくて、…その名前や、機能や、意味を失ったものとして感じるのです。すなわちそれらは「事物」となり、生き始め存在し始めるのです。そのような存在は非常な恐怖をひき起こしました。非現実の場面で、私の感覚の陰鬱な静けさの中で、突然「事物」は跳び上るのです。」³² ルネは「「事物」の生物化」³³ によって「ただ物体がそれ自身であることにより、それらは新たに存在し始めるのです。それはそこに存在し、私に向いあっており、私を怖がらせました」³⁴ と言う。ルネも、形態、用途、目的といった構造的連関の内に置かれている「物品・物体」としての「もの」が、生成する質料としての「もの」に変化してしまったことを訴えている。「前」における「もの」は、意味秩序・構造の中に安定的に位置づけられた「物品・物体」としての側面の背後に、まったく別の側面を持っているのである。ロカンタンにおいて「塊」と表現されていたこのような側面は、ルネでは「生き始め存在し始める」「もの」と把握されている。

「物品・物体」としての「もの」が背後に隠し持っているもう一つの側面、これこそ、「横」においては生成する私的な心理として把握され、「上」においては聖なる規範としての力として捉えられ、「後」においては「鬼、怨霊、もののけ」として把握される、「もの」のことではないだろうか。筆者の考えによれば、「もの」とは、「可感的な現象時空において、それ自体として時空間的な延長を持つ存在ではないが、何らかの存在に憑坐することで現象する機能体」のことであり、本源的には「無分節の生成エネルギー」を謂う。³⁵ 憑坐する対象は、「前」「横」「上」「後」のいかなる空間における存在であってもよく、それに応じてさまざまな「もの」（「物品・物体」、私的な心理・感情、「鬼、怨霊、もののけ」）が現象することになる。坂部恵は、「もの」の本源的な意味を〈生動性を帯びた他者性〉に見たが、³⁶ 彼の考えは、筆者による「もの」の概念規定を支持するであろう。

先に見たロカンタンやルネの場合、「前」の空間における「物品・物体」としての「もの」の秩序が崩壊して、「無分節の生成エネルギー」としての「もの」がいわば枠にはめられない^{なま}生の姿を現したのだと考えられる。「前」の空間における意味連関に基づく意味秩序や形態は、「もの」の「おもて」の側面であり、「無分節の生成エネルギー」という根源的な側面は「うら」の側面である。³⁷ 「無分節」たる所以は、枠にはめられない限り、限定性を持たないからである。「うら」の側面としてのエネルギーは機能体として、意味秩序に合致した形態的な限定を本来持たない。いかなる枠もはめ得るし、いかなる形態にも応じ得る。「もの」が、個々の「物体・物品」を指すこともできれば、全般的な総称としてカテゴリー名称的に使うこともできるのは、これが理由であると思われる。「うら」とし

ての側面から見れば、「もの」は無形態・無分節の生成エネルギーであるが故に一にして全である。「もの」は意味と物とのすべてを含んだ一般的な、限定せられざる「もの」である。限定せられた何ものでもないとともに、また限定せられたすべてである。畢竟の Es であるとともに Alles である(傍点は原文のまま)」³⁸ という和辻哲郎の説明は、「もの」の本源的な意味が「無分節の生成エネルギー」であるという観点から理解すべきであろう。

私たちが「もの」の「おもて」と「うら」の両側面を知ることができるのは、「うら」を把握できた者の言動に拠っている。いわゆる健常者にとっては、「前」の空間において日常的に安定した意味秩序が保たれており、その限りにおいて「もの」の「うら」の側面は背後に隠れたままなかなか表に現れてこない。ところが、精神病理学において問題となるような症状を見せる者にとっては、その反転が起こり得るのであり、彼らの言動によって私たちは反転可能性を知るのである。ロカンタンやルネはその一例である。しかしながら、日本文化において、かつては生物・無生物を問わずにあらゆるものを「活物」と捉え、世界には「鬼、怨霊、もののけ」が跳梁跋扈していた。「うら」の側面を把握することは、決して非日常的ではなかったのである。このようなアニミスティックな世界観が歴史を通じて日本文化に生きる者の心性に宿ってきていることは疑い得ず、日本精神史を見る限り、「もの」の「おもて」と「うら」の反転は、いわゆる非健常者だけに与えられる可能性ではなく、「活物」的な世界像・信念を抱く者なら多くの者にとって生じ得る事態なのだと思われる。とはいえ、「おもて」と「うら」が反転したまま、意味秩序が背後に隠れた状態で安定することはあり得ない。事態は安定した側面が「おもて」であり、「無分節の生成エネルギー」が「うら」であることに変わりはない。日本語で古来〈鬼＝隠〉と表されてきたのは、筆者の考えに従えば偶然ではない。³⁹

このような「おもて」と「うら」は、「前」の空間においてのみ区別される側面ではない。「横」の空間における「おもて」は「私的な心理・感情」であり、「上」の空間における「おもて」は「神・天」といった聖なる規範であるが、それぞれの空間において「おもて」の「うら」には「無分節の生成エネルギー」が存在している。

「横」の空間において、「うら」の側面が「おもて」を突き破って現れれば、このような主観的なパトスは、時に、かき乱され激しく動揺させられた心理状態に達する。古語における「ものがなし」「ものおそろし」「ものうらみ」「ものにくみ」「もの思ふ」等は、現代の「ものすごい」の語感に残っているような激しさ、心配・不安・恐れ怯え・焦燥・絶望といった主観的な心理状態を表し、まさに「うら」の側面を表現しているのである。古語において、「うら」が「心」の意に通じることや、「うら」は接頭辞化すること、そして「ものがなし」と「うらがなし」はニュアンスの違いこそあっても類似した意味を持つと理解できることは、筆者の考察を支持する。

一方、「上」の空間において「うら」の側面が顕わになると、神の表象が人に厄災を与えるに至ることとなる。大物主神は記紀神話において「もの」の神とされているが、疫病の流行が大物主神の祟りに帰せられる記述が見られる。ものは、「チヤタマやカミと頗る性質を異にする靈物と觀ぜられ且つ信ぜられてゐた」⁴⁰ のであり、陰惨な結果をもたらす厄災は「もの」のせいであり、その「もの」の主の中でも最有力な大物主神は「もの」の「うら」の側面の象徴と考えることができるだろう。

また、「上」の空間における「うら」の側面を別の方向から考察することもできる。「うら」の側面たる生成するエネルギーが、そのままの機能を強調されて表象されることもある。記紀神話において創世の特徴を「なる」に見た丸山眞男の論考⁴¹はよく知られているが、神々が増殖する、この「なる」

というエネルギーは、「もの」の「うら」の側面だとみなすことができるだろう。

ただし、「後」の空間においては事情が異なる。光のない闇の中でもものの「おもて」と「うら」の認識が困難であるように、「後」において「おもて」と「うら」の区別は微妙である。「鬼、怨霊、もののけ」といった「おもて」の側面は、明確な形態を具えているわけではない。

「うら」の側面は、「ものぐるい」「厄災をもたらす大物主神」「鬼、怨霊、もののけ」という表象からもわかる通り、予期通りに出現する歓迎すべき存在だとは言えない。それは、ゆゆしい、おどろおどろしい、恐怖・不安を私たちに感じさせるような存在であり、その出現をコントロールすることはできない。

さて、ここで「うら」という用語と表記について補足をしておきたい。「裏」は「表」の反対側で、通常、顕在的なパースペクティブにおいては隠されているが、視点の位置を変えることによって「おもて」となり得る、そのような側面を言う。しかし、本稿においてかな表記する「うら」は、そのような「裏」ではない。「うら」は視点の位置を変えることによって顕わになるのではなく、相貌の変化によって現れてくる側面である。「アヒル-ウサギ」としてよく知られる図形が、「アヒル」に見えたり「ウサギ」に見えたり相貌変化するのは、その図形を上から眺めたり横から眺めたり逆さから眺めたり、視点の取り方を変えることに基づくのではなく、見え方の違いを引き起こす何らかのきっかけによるのである。相貌変化は、訓練によって習熟するというより、世界の見方の違いに関わっている。このような意味において本稿では、顕在的なパースペクティブにおいて顕わになっている側面を「おもて」とかな表記し、隠されている側面を「うら」とかな表記することとする。

さてここで、ある統合失調症の患者の報告を別の例として挙げてみよう。この患者は、空間全体が相貌を変えてしまう体験を次のように報告している。「部屋は見えるには見えていました。空間は広がって限りなく増大すると思われ、同時に中のものが取り片づけられた空の感じでした。私は見捨てられて、無限に広い空間に委ねられてしまったと感じましたが、この広い空間は虚無であるにもかかわらず、恐ろしいように私の前に立ちほだかっていました。…(中略)…実感のある以前の空間は、もう一つの空間からまるで幻影のように浮き上がって感じられました。まるで自分のものでない力によって、とつぜん光景がおしのけられました。くすんだ青色の夕空の後に、ものすごい広さをもった別の黒い空が広がっているのが、心の中で見えているように思いました。…(中略)…秋の景色にもう一つ別の空間が織り込まれていたことが私にはたしかにわかっています。それは非常に微妙で、目には見えませんでした。第二の空間は暗かったり空虚であったり、物凄かったりしました。片方の空間が動くように思われたり、双方の空間が入りまじったりしました。」⁴² この報告において、「もの」は「前」「横」「上」空間における何らかのものに憑坐するのではない。空間それ自体が「もの」となって「おもて」と「うら」を具え、「おもて」の崩壊と「うら」の出現を語っている。空間自体も「おもて」と「うら」を持つ可能性があることを念頭に置いておきたい。

(2-2) 「おもて」と「うら」、奥行きと「かげ」

考察をさらに進めていこう。「もの」は、その実物が形而下的でも形而上的でも、「おもて」と「うら」を具えているのだが、その側面は「おもて」と「うら」だけに止まるのではない。「うら」は「もの」に奥行きを与え、その背後の空間に「かげ」を作り出す、と筆者は考える。「かげ」は、「前」「横」「上」における、「後」の空間と同質の「死んだ」空間である。「うら」があって「かげ」が作り

出されるという論点を、いわゆる非健常者の病態を例に取りながら例証してみたい。

まず、実体的意識性に関する報告から見てみる。実体的意識性とは、「誰かがいる。それは、声を聞いたり姿を見たりしないでもありありとわかる」という体験をいう。宮本は実体的意識性に苛まれる患者を分析する中で、「実体的意識性は例外なく「死んだ」空間に発現する」⁴³と結論づけている。本稿の言葉を使って言えば、実体的意識性とは「無分節の生成エネルギー」である「もの」、つまり「うら」の側面を体験することである。「うら」の側面を感じ取る人は、「後」の空間においてだけ「もの」が出現するのではない。「前」「横」「上」の空間においても、「かげ」から「もの」は出現するのである。⁴⁴

次の例も精神病理の分野から取ってみよう。分裂病者は、いわゆる健常者と異なる世界相貌を持つことが知られている。分裂病患者の描く絵は、家屋でも人でも動物でもすべて真正面ないしは真横から描かれていて極めて平面的であることが報告されている。⁴⁵「彼らの視線は対象の表面に冷たく突き当たるばかりで、その深さを見透したり、またはその奥へ行くことができなくなる。すなわち、彼らにとって奥行の知覚はもっとも苦手となるのであって、このことは、人物像にせよ、建物にせよ、彼らの描く画像がもっぱら真正面からの対称的な平坦な像であるという事実によく示されている（傍点は原文のまま）」⁴⁶と宮本は書いている。この患者は「うら」の「無分節の生成エネルギー」を把握できないため、すべてのものから「うら」と「かげ」、奥行きが失われているのだと考えられる。

離人症の患者が、「外界を見ても、現実感がなく、色あせた写真でも見るように、生気を欠いた形象が平板に立ちならんでいるにすぎない」⁴⁷と感じる傾向は宮本だけでなく、木村敏もつとに指摘する点である。「うら」の「無分節の生成エネルギー」を理解できないと、世界が「かげ」や奥行きを失い、動きや生気をも失くしていく。結果、こういった患者の「心性は流動するもの・変化するもの・発展するもの・非合理的なもの、一言でいえば生の豊饒さが失われて、まったく固定的・設計図的・空間的・幾何学的なもので占められる」⁴⁸のである。

「もの」の「うら」の側面は、「前」「横」「上」の空間において「かげ」、奥行きを作り出し、それ故に私たちは生動性を感じ取っている。「うら」の側面を強く感じ取る者は、「かげ」から「もの」が出現するし、「うら」の側面を感じ取れなくなった者は「かげ」や奥行き自体を失うのである。

第三章 終わりに

本稿において「もの」の概念規定を試みた。要約すれば、「もの」は可感的現象においては「生きられる空間」の異方的な空間特質と主体との関係性に応じて意味特性を帯びた存在を指す。そして、その存在は「おもて」と「うら」の両側面を持ち、「うら」の側面とは「無分節の生成エネルギー」のことである。これこそが「もの」の根源的な概念に他ならない。「前」「横」「上」の空間において、「うら」は「おもて」の背後の拡がりとして「かげ」と奥行きを作り出し、「無分節の生成エネルギー」はそこに潜んでいる。宮本は「分裂病の体験を言語の面から考えていく場合、その基点となるのはやはり、これまで親しんでいた世界が無気味に変貌をとげるあの破局体験であろう。机上の事物が日常的な意味を失って〈もの〉それ自体と化し、無気味は相貌を帯びてせり出してくる」⁴⁹という統合失調症患者の体験を「〈もの〉体験」⁵⁰と名づけている。本稿の論考は宮本の考えを論証するものとも言える。

本稿では詳細に論じる余裕がなかったが、「もの」は「ひと」においても働いている。「ひと」の

「おもて」（容貌や意識）に対する「うら」（無意識）の側面とは、その人の生成エネルギーの湧出である。私たちの他者理解において、「うら」を強く感じ取るとその人の行動すべてに「うら」の意味を求めることしかできなくなるし、「うら」を感じ取れないとその人の「かげ」や奥行きを把握できずに平板的な理解（目に見え耳に聞こえる情報だけによる理解）しかできなくなる。自己理解においても同様である。「うら」を強く感じ取るということは、「おもて」の崩壊をもたらす可能性があり（かつての「ものぐるい」）、「うら」を感じ取れない場合は生動性を失ってしまって、生き生きとした世界把握・自己理解ができなくなるだろう。「もの」という表象自体、自己の「うら」（無意識）の投影の可能性すらあるだろう。

また、統合失調症患者が、メタファーやことわざのように、表面的（辞書的）な意味を超えた理解をしなければならない言語表現の解釈が苦手であったりできなかったりする現象も、本稿と関連して興味深い。

「もの」の概念規定は他の概念との意味連関の中で考察するべきである。日本文化における重要なひとつの鍵である「なる」という概念や、「ものごと」と組み合わせられて語られることの多い「こと」といった概念と、「もの」がどのように関連し、どのようにつながりがあるのか、解明することが求められるがその研究については稿を改めたいと思う。

注)

- 1 井原奉明 『日本語における「もの」と「こと」の概念に関する研究』（博士論文）昭和女子大学 2010年
- 2 『大辞林』によると、終助詞としての用法は形式名詞的用法から近世以降に生まれたのであり、活用語の連体形を受けて文を終止し、感動の気持ちを表す用法は上代からあると言う。よって、終助詞としての「もの」の意味特性は形式名詞的用法のそれと重なる。
- 3 宮本忠雄 「精神病理学における時間と空間」 p. 263（『異常心理学講座 10』 みすず書房 1965年 pp. 243-294）
- 4 宮本忠雄 「実体性意識性について」『妄想研究とその周辺』（弘文堂 1982年 pp. 3-54）。この論文は1959年初出。後に、本注3で言及した論文「精神病理学における時間と空間」においても同様の説を展開している。
- 5 宮本 同上 p. 36
- 6 宮本 同上 p. 36
- 7 宮本 同上 p. 37
- 8 宮本 同上 p. 37
- 9 宮本 同上 p. 38
- 10 宮本 同上 p. 36
- 11 宮本 同上 p. 36
- 12 宮本 同上 p. 36
- 13 宮本 同上 p. 37
- 14 宮本 同上 p. 37
- 15 宮本 同上 p. 37
- 16 宮本 同上 p. 37
- 17 宮本 同上 pp. 37-38
- 18 宮本 同上 p. 38 参照。

- 19 「もの」の知覚は常に〈観点を伴う知覚〉である。知覚によって原所与として意識に与えられる「もの」は、一挙に全体が見通されることはなく、無数の可能な観点の中から選び取られたひとつの観点から遠近法的に把握された現出のみが知覚される。しかし「もの」の知覚において私たちは志向性の能作によって、特定観点からの顕在的な現出を把握するだけでなく、無数の可能な観点から得られる潜在的な現出の総和を了解し、顕在的現出と関係づけることによって、現出者（統一的なひとつの全体）として「もの」を知覚する。「もの」の知覚は、観点には依拠するが、一人称だけに接近可能な特権があるわけではないと筆者は考える。
- 20 市川浩 「方向性と超越」 p. 241 (『身体論集成』所収 岩波現代文庫 2001年 pp. 237-278)。同様の主張は、「生きられる空間」(『〈身〉の構造』青土社 1984年)にも見られる。
- 21 市川 同上 p. 243
- 22 市川 同上 p. 243 参照。
- 23 依代としての「もの」には、巨木、巨岩、山神等の自然物、太陽、風、雷等の気象現象、竜神や河童等の想像上の生物、さらには九十九神等、無生物も人工物もある。記紀神話における人格神には大物主という神もいる。
- 24 市川 同上 pp. 255-256
- 25 市川 同上 p. 256
- 26 万葉集において、「もの」に「鬼」という漢字を当てていたことは『倭訓栞』に記されている。たとえば、「吾妹子に心も身さへ寄りにしものを」(万葉集 五四七)の「ものを」は「鬼尾」と書かれているし、「一目見し児に恋ふべきものか」(万葉集 二六九四)の「ものか」は「鬼香」と書かれている。『大言海』には「人ニマレ、何ニマレ、魂トナレル限り、又ハ、霊アル物ノ幽冥ニ属キタル限り、其物ノ名ヲ指シ示シテ言ハヌヲ、ものト云フヨリ、邪鬼ト訓メリ。又、目ニ見エヌヨリ、大凡ニ、鬼、魂ヲ、ものト云ヘリ」と書かれている。
- 27 宮本忠雄 『言語と妄想』(平凡社ライブラリー 1994年) p. 288
- 28 宮本 同上 p. 288
- 29 ジャン＝ポール・サルトル 『嘔吐』(鈴木道彦訳 人文書院 2010年) pp. 212-213
- 30 サルトル 同上 p. 213
- 31 サルトル 同上 p. 209
- 32 セシュエー 『分裂病の少女の手記』(村上仁・平野恵共訳 みすず書房 改訂版 1971年) p. 38
- 33 セシュエー 同上 p. 41
- 34 セシュエー 同上 p. 63
- 35 「もの」はマナ、気といった概念と類縁性があると思われる。ギリシア哲学におけるヒュレーとも近いと思われるが、「もの」には「材料」「非本質」といった規定はない。
- 36 坂部恵 「ことば・もの・ころ」(『坂部恵集3』岩波書店 2007年 pp. 343-368) 参照。
- 37 長谷川三千子は『日本語の哲学へ』(ちくま新書 2010年)において、本稿が「おもて」と「うら」として把握する側面を「表層」と「深層」という深度において見て、本稿と似た結論を記している。長谷川は「「もの」という言葉の〈意味の水深〉は、おそろしく深い。その表面近くにおいては、「もの」は単なる「存在者」にすぎず、「単なる物体」をあらわすにすぎない。しかし、その底へともぐってゆくと、「もの」はそのまま、目も鼻も口もない混沌の姿——いまだ有と無とが分離していない領域の消息——へとつながっている」(p. 192)と考える。本稿との違いは、長谷川が「「もの」という言葉には、本来〈無のかげ〉がつきまとしており、その根源には、物を物としてとらえること——存在する事物の具体相を消し去って、それをただ「物」ととらえること——がある」(p. 189)と述べる点にある。「もの」の無分節な側面を「事象の具体相を消し去ってそれを把握する」(p. 187)と考える長谷川は、「事象の具体相」が無分節の相に〈先行する〉と前提しているが、筆者は逆ではないかと考える。つまり、根源的には無分節である「もの」が「前」

「横」「上」の空間において「おもて」としての枠をはめられるが故に「おもて」としての「事象の具体相」が現れるのではないだろうか？ 記紀冒頭において「もの」が「状貌言ひ難し」と描かれているのは、根源的な〈先行性〉を表しているのだと筆者は考える。

- 38 和辻哲郎 「日本精神史研究」(『和辻哲郎全集第4巻』岩波書店 1989年) p. 150
- 39 『和名類聚抄』に「鬼 和名於爾，或る説に云ふ隠字 音於尔。訛也 鬼，物に隠れて形を顕^{すがた}はすこと欲りせず，故に俗に呼びて隠と曰ふなり」とある。
- 40 松村武雄 『日本神話の研究 第四巻』(培風館 1958年) p. 202
- 41 丸山眞男 「歴史意識の「古層」」(『丸山眞男集 第十巻 1972-1978』岩波書店 1996年)
- 42 宮本 『言語と妄想』 pp. 239-240
- 43 宮本 『妄想研究とその周辺』 p. 40
- 44 英語においても同様の現象が見られる。phantasm, phantom はまさに「かげ」である。
- 45 宮本 『言語と妄想』 p. 245 参照
- 46 宮本 同上 p. 246
- 47 宮本 同上 p. 243
- 48 宮本 同上 p. 215
- 49 宮本 同上 p. 288
- 50 宮本 同上 p. 289

引用文献

- 市川浩 『〈身〉の構造』 青土社 1984年
- 市川浩 『身体論集成』 岩波現代文庫 岩波書店 2001年
- 井原奉明 「日本語における「もの」と「こと」の概念に関する研究」(博士論文) 昭和女子大学 2010年
- 岩井寛 『闇と影』 青土社 1984年
- 坂部恵 「ことば・もの・ところ」『坂部恵集3』 岩波書店 2007年
- ジャン-ポール・サルトル 『嘔吐』 鈴木道彦訳 人文書院 2010年
- セシュエー 『分裂病の少女の手記』 村上仁・平野恵共訳 みすず書房 改訂版 1971年
- 長谷川三千子 『日本語の哲学へ』 ちくま新書 筑摩書房 2010年
- フロイト 「不気味なもの」『フロイト全集17 1919-1922年』 須藤訓任他訳 岩波書店 2006年
- 松村武雄 『日本神話の研究 第四巻』 培風館 1958年
- 丸山眞男 「歴史意識の「古層」」『丸山眞男集 第十巻 1972-1978』 岩波書店 1996年
- 宮本忠雄 「精神病理学における時間と空間」『異常心理学講座10』 みすず書房 1965年
- 宮本忠雄 『妄想研究とその周辺』 弘文堂 1982年
- 宮本忠雄 『言語と妄想』 平凡社ライブラリー 平凡社 1994年
- 和辻哲郎 「日本精神史研究」『和辻哲郎全集第4巻』 岩波書店 1989年

(いはら ともあき 英語コミュニケーション学科)